郷土的味覚

寺田寅彦

日常の環境の中であまりにわれわれに近く親しいために、かえってその存在の価値を意識しなかったようなものが、ひとたびその環境を離れ見失った時になって、最も強くわれわれの追憶を刺戟することがしばしばある。それで郷里に居た時には少しも珍しくもなんともなかったものが、郷里を離れて他国に移り住んでからはかえって最も珍しくなつかしいものになる。そういう例は色々ある中にも最も手近なところで若干の食物が数えられる。その一つは寒竹の筍である。

高知近傍には寒竹の垣根が多い。隙間なく密生しても活力を失わないという特徴があるために垣根の適当

な素材として選ばれたのであろう。あれは何月頃であろうか。とにかくうすら寒い時候に可愛らしい筍をにょきにょきと簇生《そうせい》させる。引抜くと、きゅうっきゅうっと小気味の好い音を出す。軟らかい緑の茎に紫色の隈《くまど》取りがあって美しい。なまで噛むと特徴ある青臭い香がする。

年取った祖母と幼い自分とで宅の垣根をせせり歩いてそうけ（笊《ざる》）に一杯の寒竹を採るのは容易であった。そうして黒光りのする台所の板間で、薄暗い石油ランプの燈下で一つ一つ皮を剝《は》いでいる。そういう光景が一つの古い煤けた油画の画面のような形をとって四十

余年後の記憶の中に浮上がって来るのである。自分の五歳の頃から五年ほどの間熊本鎮台（ちんだい）に赴任したきり一度も帰らなかった父の留守の淋しさ、おそらくその当時は自覚しなかった淋しさが、不思議にもこの燈下の寒竹の記憶と共に、はっきりした意識となって甦って来るのである。

　虎杖（いたどり）もなつかしいものの一つである。日曜日の本町（ほんまち）の市で、手製の牡丹餅（ぼたもち）などと一緒にこのいたどりを売っている近郷の婆さんなどがあった。そのせいか、自分の虎杖の記憶には、幼時の本町市（いち）の光景が密接につながっている。そうして、肉桂酒（にっけいしゅ）、甘蔗（さとうきび）、竹羊羹（たけようかん）、

そう云ったようなアットラクションと共に南国の白日に照らし出された本町市の人いきれを思い浮べることが出来る。そうしてさらにのぞきや大蛇の見世物を思い出すことが出来る。

三谷（みたに）の渓間へ虎杖取りに行ったこともあった。薄暗い湿っぽい朽葉の匂のする茂みの奥に大きな虎杖を見付けて折取るときの喜びは都会の児等の夢にも知らない、田園の自然児にのみ許された幸福であろう。これは決して単なる食慾の問題ではない。純な子供の心はこの時に完全に大自然の懐に抱かれてその乳房をしゃぶるのである。

楊梅（やまもも）も国を離れてからは珍しいものの一つになった。高等学校時代に夏期休暇で帰省する頃にはもういつも盛りを過ぎていた。「二、三日前までは好いのがあったのに」という場合がしばしばあった。「お銀がつくった大ももは」という売声には色々な郷土伝説的の追憶も結び付いている。それから十市（とうち）の作さんという楊梅売りのとぼけたようで如才（じょさい）のない人物が昔のわが家の台所を背景として追憶の舞台に活躍するのである。

大正四、五年頃、今は故人となった佐野静雄博士から伊豆伊東の別荘に試植するからと云って土佐の楊梅の苗を取寄せることを依頼された。郷里の父に頼んで

良種を選定し、数本の苗を東京へ送ってもらった。これがさらに佐野博士の手で伊東に送られ移植された。そしてこの苗の生長を楽しみにしておられた博士は不幸にして夭折（ようせつ）されたのである。亡くなられる少し前に、たしかこれらの楊梅が始めて四つとか五つとかの実を着けたという消息を聞いたことがあったように思う。その後さらに数年を経過した現在のこの楊梅の苗の運命がどうなっているか。伊東へ行く機会があったら必ず訪ねてみようと思うものの一つにはこの楊梅のコロニーがあるのである。

色々の木の実を食ったことを想い出す。昔の高坂橋（たかさかばし）

の南詰に大きな榎樹（えのき）があった。橙紅色の丸薬のような実の落ち散ったのを拾って噛み砕くと堅い核の中に白い仁（にん）があってそれが特殊な甘味をもっているのであった。この榎樹から東の方に並んで数本の大きな椋（むく）の樹があった。椋の実はちょっと干葡萄のような色と味をもっている。これが馬糞などと一緒に散らばっているのを平気で拾って喰うのであった。われわれ当時の自然児にはそれが汚いともなんとも思われなかった。これらの樹の実を尋ねて飛んで来る木椋鳥（こむくどり）の大群も愉快な見物であった。「千羽に一羽の毒がある」と云ってこの鳥の捕獲を誡（いまし）めた野中兼山（のなかけんざん）の機智の話を想い出

す。

公園の御桜山（おさくらやま）に大きな槙（まき）の樹があってその実を拾いに行ったこともあった。緑色の楕円形をした食えない部分があってその頭にこれと同じくらいの大きさで美しい紅色をした甘い団塊が附着している。嚙み破ると透明な粘液の糸を引く。これも国を離れて以来再びめぐり逢わないものの一つである。

旧城のお濠（ほり）の菱（ひし）の実（み）も今の自分には珍しいものになってしまった。あの、黒檀（こくたん）で彫刻した鬼の面とでも云ったような感じのする外殻を嚙み破ると中には真白な果肉があって、その周囲にはほのかな紫色がにじん

でいたように覚えている。

公園と監獄、すなわち、今の刑務所との境界に、昔は濠があった。そこには蒲（がま）や菱が叢生（そうせい）し、そうしてわれわれが「蝶々蜻蛉（とんぼ）」と名付けていた珍しい蜻蛉が沢山に飛んでいた。このとんぼはその当時でも他処（よそ）ではあまり見たことがなく、その後他国ではどこでも見なかった種類のものである。この濠はあまり人の行かないところであった。それが自分の夢のような記憶の中ではニンフの棲処（すみか）とでも云ったような不思議な神秘的な雰囲気につつまれて保存されているのである。帰省してこの濠のあったはずの場所を歩いてみても一向に

想い出せないような昔の幻影が、かえって遠く離れた現在のここでの追憶の中にありありと浮んで来るのである。

これらの樹の実の記憶には数限りもない少年時代の生活の思い出がつながっている。そうしてこれらの自然界とつながっているものほどその思い出の現実性が深いように思われるのである。

交通の発達につれて都会と田舎の距離は次第に短縮する。今ではたいていの田園の産物もデパートの陳列棚で見られるのであるが、それでもまだ楊梅や寒竹の筍は見られない。菱や色々の樹の実は土佐に限らぬも

のであろうが、しかしこれらの都会の食味の中に数えられないためか、どこでも手に入れることが出来ない。そういうものが食物になり得るという事さえ都会の子供等は夢にも知らないのである。考えてみると可哀相なような気がする。

滞欧中のある冬にイタリアへ遊びに行った。ローマの大学を訪ねたとき、物理学教室の入口に竹の一叢（ひとむら）を見付けてなつかしい想いをした。その日の夕方、ホテルの食堂で食事のあとに出した菓物鉢の数々の果物の中にただ一つ柿の実がのっかっていた。同時に食事していた客の誰よりも真先に自分のところへこの菓物鉢

が廻って来たので、自分は遠慮なくこのただ一つの柿を取上げた。少しはしたないような気はしたが、天涯の孤客だからと自分で自分に申し訳を云った。このローマの宿の一顆(いっか)の柿の郷土的味覚はいまだに忘れ難いものの一つである。

味覚の追憶などはあまり品の好い話ではないようである。しかしそれだけに原始的本能的に深刻な真実性をもっている。そうしてその背後にはやはり自分の一生涯の人間生活の記録が隠されているのである。

(昭和七年二月『郷土読本』)

底本：「寺田寅彦全集　第一巻」岩波書店
１９９６（平成８）年12月5日発行
入力：Nana ohbe
校正：松永正敏
２００４年3月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。